

対話の構造

〈私-汝〉の「二人対話」に第三者（彼）が介在することで成立する「三人対話」。第三者は、〈私-汝〉の外に立つ〈彼〉であるとともに、〈私〉の内にある〈もう一人の私〉でもある。対話の構造を成り立たせる〈彼〉の意味を明らかにする。

I もう一人の〈私〉

・二人対話と三人対話

二人の交わす言葉（ディアロゴス）には、第三者（彼）が介在する。→①

・沈黙のパートナー——もう一人の〈私〉

Cf・ハンナ・アレント『責任と判断』→②

・「三者関係」再考

発する言葉が、相手の〈隠れた自己〉に届かなければ、〈あいだ〉は開かれない。

〈隠れた自己〉が関与する「三人対話」によって、〈あいだ〉は開かれる。

II 対話は何のために

・風土的実践——〈出会い〉から〈対話〉へ

相手の内に入り込む言葉のはたらきが、〈あいだ〉を開く。

・〈気づき〉の共有

それぞれの内なる〈もう一人の私〉への呼びかけ

〈汝〉に答える〈私〉——〈気づき〉の成立

[資料]

① 二人対話と三人対話

「〈二〉が、対峙する当事者のあいだで閉じられる関係を表すのに対して、〈三〉は、そこから外へと広がる関係を予想する。どれほど多数からなる関係も、〈三〉に還元されると見ることができる。それゆえ、多数による対話を三者関係によって代表させることに、別段不都合はないと考えられる。仮に、それを「三人対話」と呼ぶことにするなら、「二人対話」と「三人対話」には、いかなる共通点、また相違点が存在するのか」（拙稿「〈二〉と〈三〉のあいだ——対話の条件」『関西大學文學論集』第七十二巻第一・二合併号、2022年9月、三頁）。

② ソクラテスにおける自己

「わたしは一人なのですが、たんに一人なのではなく、わたしには自己というものがあり、この自己はわたしの自己として、わたしにかかわりがあるということです。この自己は幻想などではありません。この自己はわたしに語りかけてきて、みずからの意見を語るのです。わたしは自己自身と語りあうのであり、自分自身をたんに意識しているだけではないのです。この意味ではわたしは一人ですが、わたしという一人のうちに二人の人がいるのです。そしてわたしはこの自己と調和したり、調和しなかったりするのです」（ハンナ・アレント『責任と判断』ジェローム・コーン編・中山元訳、ちくま学芸文庫、149頁）。

[概要]

前回(4.5)「あいだに立つ—第三者の役割」では、第三者(彼)の役割を考えた。今回は、対話に占める〈彼〉のはたらきを追及する。このテーマに関係する「哲学講話」は、「沈黙と語りの〈あいだ〉」(25.7.6)と「3つのコスモス」(11.2)。語りに先立つ〈沈黙〉、「ミクロコスモス」における〈自己内対話〉を指摘した。それらの意味が、最近読んだアレントのテキストから明らかになった。

I もう一人の〈私〉

風土学的実践の中心テーマは、〈対話〉。「二人対話」と「三人対話」の関係——対話は、〈私—汝—彼〉の三者関係において成立する。→①

旧稿の時点では、二つの対話形式を区別したうえで、〈二人対話→三人対話〉〈三人対話→二人対話〉というように、〈二〉と〈三〉が反転し合う関係を考えた。この認識をひっくり返して、すべての対話が「隠れた自己」(もう一人の私)が関係する(理念上の)「三人対話」であるという考えに至った。アレントは、ソクラテスの場合を手がかりとして、思考とは〈私〉が隠れた〈もう一人の自己〉と行う対話であることを論証している。→②

[ソクラテスによる問い:「悪しきことを為すよりも、悪しきことを為される方がましである」のはどうしてか?——答え:悪しきことを行った者は、自分の内に悪しきことを行った者を抱え込んでしまい、この者を追い出すことができない=自己自身との不調和]

〈自己内対話〉は、沈黙のパートナーである〈もう一人の私〉との間で行われる。それを触発するのが、目の前の他者との間で行われる「二人対話」。対話者甲と乙とに、それぞれの〈自己内対話〉が展開することによって、外見上の二人対話は、実質的に二つの「三人対話」を意味するということになる(図示)。「対話の会」は、〈私—汝〉のやりとりに他の第三者(彼)が関与するという「三人対話」の世界。そこにおいて、〈私〉の言葉が、〈汝〉の内に潜む〈もう一人の私〉に届くかどうか、対話のカギとなる。

II 対話は何のために

(1)「風土学的実践」と(2)「気づき」の問題。

(1)——異なる風土の〈あいだ〉を開くためには、出会う他者と言葉を交わすことから始める以外にない。「対話の空間」として想定されるのは、メゾコスモスとしての共同社会。そこに成立する対話は、ミクロコスモスでの〈自己内対話〉を核として外部の他者と交わる「三人対話」であることが判明した。「三つのコスモス」で課題としたのは、マクロコスモスにおける「間風土的対話」をいかに実践するか。言えるのは、すべての主体の内に潜む〈もう一人の私〉が対話のカギだということである。

(2)——対話の成否は、他者との言葉のやりとりをつうじて、それぞれの内に〈もう一人の私〉との対話によって、〈自己との調和〉が成り立つかどうかにある。〈自己との調和〉によって「気づき」が生じる。